文芸

俳句

秋の雲散らすみずうみ朗人句碑　池田　逸子
乾燥機見回る納屋の秋の声　伊藤　敬子
一歳の孫の手形や障子張り　今関満喜子
お月様あんたも一人腕まくら　魚地　照子
会話ふと途切れて虫の夜となれり　江森　悦子
渋柿や植木屋憾む三十年　大谷　武彦
稲を刈る棚田の親子声透る　川島　孝夫
お土産は落柿ですと暴れ風　川島　通則
秋天や傘寿を祝ふ同窓会　向後　寛
琴を弾く一人の部屋の秋気かな　越川せつ子
虫の音のぴたりと止めるにわか雨　小松　藤男
新盆や白提灯の墨黒し　佐瀬　輝夫
不景気も円高もなく柿が熟れ　鈴木とし子
芭蕉にも子規にもなれず柿を剥く　鈴木　利子
爆音を呑み込み秋の空深し　玉虫　栗扇
夜通しの風に遊ばれ熟柿落つ　土屋美枝子
揺るぎなき一句の欲しき柿熟れる　土屋　義昭
小鳥来てわれにささやく如く有り　戸村　静萃
鈴なりの柿をみたさに汽車にのる　西崎さち子
夕食の卓にゴーヤの濃きみどり　早川　勇

短歌

虫の音のそぞろ寂しき更けし夜の
今は酷暑も亦良かりけり　越川　福子
大空を我がもの顔の赤トンボ
マニラの空の思い出うかぶ　鈴木　益郎
嫁ぎゆく娘の荷のごとく出荷米
積みしトラックしばし見上ぐる　越川　義則
辛いこと分け合いながら暮しいる
楽しいことは共に喜び　高梨　キヨ
ゆらゆらと洗濯物を乾かして
里の隅まで秋風の吹く　土屋　好
我が列島地震津波の悲しみが
癒える間もなく豪雨の被害　伊藤　定男
ハーブ園の上空流るる絹雲を
夕つ日やはらに照らしぬるなり　西山満里子
穏やかに今日も一日生きますと
微笑む夫の遺影に語る　八角　三枝
息子のくれし音楽会の予約券
四ヶ月待ちて今日は来たりぬ　田崎　尚美
川土手に茁の空を眺めぬつ
残暑の日々も終り近きか　鈴木まさ子
肌寒くなりたる今日は蠅一匹
吾に寄り来る追へば又来る　押尾　輝子
秋の夜をラジオ聞きつつ採れたての
胡麻を選り分け更けるを知らず　青木　秀子
百日紅うす紅に咲き誇り
庭の片隅ほのと明るし　平山　芳子
鈴虫の鳴く音聞かむと庭に出て
腰を低くし耳を澄ませり　吉岡　信子
風邪に臥す吾を気づかひ義妹は
野菜の煮物届けくれたり　芹川　初子
連れもなく独りぼっちの空間に
包まれぬたりはとバスの中　島田ますみ
動きゆく白雲の上に筋雲の
動かぬがあり秋空深し　斉藤つね子

こうほう博物館 44

山百合と蝶

この絵は鈴木総男という、小川台地区に居を構え、鍬をふるう傍ら、一生、絵を描き続けた画家の作品です。緑の草原の中に、凛として咲く白い山百合の花が、浮き出るように全体をしめ、その花に蝶が乱舞する幻想的な絵です。絵の大きさは90×116センチで、周りを圧倒する威圧感はありませんが、静かに何かを語りかける存在感はあります。

鈴木総男氏は、このような山百合や蝶を好んで描き、彼の作品の大きな特徴となっています。もう一つ、彼の作品の多くに風景画がありますが、中でも信州安曇野を題材にしたものが最も好んで描かれました。五十を過ぎて彼は、毎年のように田植えが終わると、同好の士と連れ立って安曇野へ、写生に出かけていたそうです。彼の作品の特徴は、自然を題材にした、緑を基調とする明るいものが中心のように感じます。しかし、その反面、褐色を基調とした晩秋や、薄暗い人間の裏面を映したような作品もあり、彼の気持ちの内面を垣間見るような気になります。

彼は終世、農業を生活の糧とし、描いた絵は親戚や知人にあげるくらいでした。絵画展にも出品して、賞を受けたこともありました。美術大学で勉強しないで、ほとんど独学で絵を描き続けた彼の作品は、あまり顧みられることはありませんでしたが、描き続けた作品は膨大な数になり、中には優品も多数あります。平成八年から翌年にかけ、思うところあって、四国八十八箇所を巡礼しながら絵を描き残しました。その壮絶な画業は、作品を見ることによって知ることができます。十二月四日まで、町民ギャラリーで「鈴木総男　回顧展」が開催中です。ぜひ、ご覧ください。

▲山百合と蝶